毛利宗家と徳山毛利家

小山良昌

はじめに

徳山毛利家の遠祖は、鎌倉幕府の草創期に将軍源頼朝のブレーンとして幕府に招聘された、文章道を家学とする大江広元である。その広元の祖先は平城天皇の御子阿保親王に至る。すなわち、毛利家の遠祖は皇族に至るのである。

毛利家の本姓である大江家は、京都において菅原道真の菅原家と同様に学問で朝廷に仕えた家柄で、学者の家「菅江二家」と称されていた。

中興の祖毛利元就は、安芸国の小領主から、一代で中国地方を手中に収めた一大英傑であるが、その一方で、皇室への尊崇の念は篤いものがあった。当時の皇室は経済的に貧窮の極にあって、践祚された天皇が即位式を挙行するまでには、経済的理由から平均十～十五年かかるという有様だった。その皇室の窮状を知った毛利元就は、践祚されて間もない正親町天皇の即位式料一切を献納され、その結果無事即位式が挙行された。また、石見銀山も朝廷に献上されたのである。

正親町天皇のお喜びが如何ばかりであったか。天皇は元就を諸国六十六ケ国中第一等国として扱われた陸奥守に任命すると共に、元就に菊御紋を下賜された。ここに毛利家は、臣下では数少ない「菊御紋」を家紋に持つ家柄として存在することになったのである。以後皇室との間には、伝奏公家の勧修寺家を介して、盆暮の贈品や慶弔時の献上品、時には経済的援助を通じて朝廷に出入りし、皇室から信頼され、信任されてきた。

徳川幕府は諸大名が朝廷との接触は勿論、入京する事さえも厳しく制限していたが、そのような経緯もあって、毛利家だけは例外的に入京が許され、京都三条には藩邸を造築し、従来通り朝廷へ盆暮の献上などを行ってきた。従って、「勤王の毛利家」は江戸時代の人々の常識であり、特に天皇鼎膝の京都市中の人々にとって、毛利家は「天皇の信頼篤い毛利家」として存在していた。

幕末の動乱期、藩主毛利敬親が終始一貫〝勤王〟の立場で行動したことは、当然家臣の思想、行動にも反映した。吉田松陰や高杉晋作、久坂玄瑞ら多くの家臣が「勤王の志士」として活躍した背景には、主君である毛利家の「勤王」思想が存在し、その藩主毛利家の立場に添った家臣達の「尊皇行動」があったのである。

I　徳山藩の誕生と毛利輝元の思惑

毛利元就の孫輝元は、宍戸隆家の娘「南の御方」と結婚していたが、長らく子宝に恵まれなかった。その後、児玉三郎右衛門元良の娘「二の丸様」を側室とし、長男秀就、長女に次いで慶長七年（一六〇二）には二男就隆が誕生した。就隆は幼名を百助、三次郎、のち就隆と称し、日向守に叙せられた。

長男秀就は物心が付き始めた五才で萩藩初代藩主に就任し、草創間もない藩体制維持、確立のために、随分と苦労を重ねているのに対し、二男の就隆は父輝元の慈愛を一身

に受け、比較的自由気ままな幼年時代を過ごした。関ヶ原敗戦後の失意の父輝元にとって、幼い就隆の誕生は希望と安寧を与えたことだろう。

元和三年（一六一七）、父輝元は藩主秀就と相談して、元服した就隆の強い希望を叶える形で、就隆に都濃郡内の総石高三万石余の領地目録を与えた。そして、誕生間もない藩の家老には、萩藩から重臣の桂美作、神村豊後を派遣し、藩草創期の経営を委ねた。また家臣には萩藩士の兄弟やその縁戚者を中心に採用して藩士とした。そして、慶安三年（一六五〇）九月、就隆が野上邸に入り、野上の地を徳山と改称して徳山藩が誕生した。

ここに、毛利宗家を中心として、防長両国内は西の豊浦郡に長府毛利家、中央の都濃郡に徳山毛利家、東の玖珂郡には吉川家を配し、元就時代に吉川・小早川の両家を配した「毛利の両川」を再現した形の体制が整った。

さらに、父輝元の考えは、その姻戚関係にある宗家と三末家との紐帯をより強固にするため、長女（就隆の姉）を吉川広正に嫁がせ、その一方で、二男就隆十九才の室には長府毛利家から秀元の長女松菊姫十一才をもらい受けて婚姻関係を結ばせ、宗家を中心とする末家三家の関係を不動のものとしたのである。

しかし、残念ながらその後、毛利就隆と室松菊姫との間に離婚が成立し、結果的には父輝元の思惑とは異なった結末となっている。

Ⅱ　三代毛利元次と毛利吉元の宗家襲封

三代藩主元次は父就隆の性格を受け継ぎ、文武両道に秀でた俊才であった。寛文七年（一六六七）、侍女銀の子として京都に生まれ、二代藩主元賢の急逝にともなって、元禄二年（一六九〇）三代藩主に就任した。

元次は資性明敏かつ自立心が強く、藩主に就任すると、従来から藩の運営に深く関わっていた家老の桂民部、神村将監の両名を追放、断絶させるとともに、父就隆以来の制度を整え、自ら理想とする藩政を積極的に進めた。

また、自ら「徳山愚人」と号し、学を好んで当代一流の学者、知識人らと交わって研鑽し、和歌、俳句、漢詩、書にも優れた文化人でもあった。読書人としても知られ、収蔵した書籍は三万巻余に達し、読書用の棲息堂を邸側に建て、家臣や好学の士との交遊場とした。

宝永四年（一七〇七）、宗家の四代藩主吉広が三十五才の若さで逝去した。吉広には未だ嗣子がなく、血統上は、毛利家本流である毛利輝元の血筋の者は、宗家か徳山毛利家にしか存在しなかったので、輝元の直系孫に当たる元次は当然最有力候補者と考えられた。しかしながら、宗家五代藩主に就任したのは、末家の長府毛利家から選ばれた毛利吉元二十七才であった。元次の心に、本藩に対する不信、疑念が生じて当然であった。

正徳五年（一七一五）、本藩領と徳山領の境界に当たる万役（若）山で、たった松木一本の伐採が原因となって殺傷事件が発生し、本藩と徳山藩の対立、引いては宗家の吉元と元次が対立した状態となった。いわゆる「万役（若）山事件」である。

その後、徳山藩が改易に至るまでには、両藩間に和解のチャンスは幾度も在りながら、最終的に改易にまで発展した裏には、元次の心理状態として、

「当方こそは毛利家本流だ。傍流の吉元、何するものぞ」の思いが有ったのではなかろうか。

翌六年（一七一六）、元次の頑なな態度に対し、宗家吉元は「徳山藩主元次の引退と嗣子百次郎の藩主就任」を幕府へ請願した。ところが、それを受諾した幕府はより厳しい処分を下し、徳山藩を改易に処し、藩主元次を出羽国新庄藩へお預けの身としたのである。

それから三年後の享保四年（一七一九）、宗家吉元は、「旧徳山藩主元次の罪を許し、元次の嗣子百次郎を新藩主とした徳山藩再興」が許可されるように、と幕府に願い出た。その結果、同年五月二十八日、幕府は宗家の願いを承諾し、徳山藩の再興を許可したのである。

新庄藩にお預けの身であった元次も罪を許され、同年十月江戸藩邸に帰った。元次は帰藩して間もない十一月、徳山藩再興を見届けた上で逝去した。

Ⅲ　毛利敬親と広封の宗家入家

幕末の本藩十三代藩主毛利敬親は、正室都美子、側室花里との間に一男三女をもうけているが、いずれも夭逝して嫡子がいなかった。

そこで、嘉永四年（一八五一）八月、敬親は末家の長府毛利家から八才になったばかりの銀姫を養女にし、同年十一月には、同じく末家徳山毛利家から藩主元蕃の弟明敬（後の元徳）十二才を養子に迎え入れた。この長府・徳山両末家の関係は、江戸時代の初期に毛利輝元の思惑を壊した離婚問題が起きて以来、必ずしも良好な関係とは云えなかったが、両末家から宗家に養女、養子として入ったことは、両末家の関係改善には効果的な出来事であった。

さらに、安政元年（一八五四）、敬親は十五才となった明敬を聟養子と定め、元服させて名を広封と改め、正式に世子とした。即ち、広封を次期の萩藩主と定めたのである。

過去、末家の長府毛利家からは五代吉元、七代重就が宗家を継いで藩主となっているが、徳山毛利家からは一度も宗家藩主を継いだ者がいなかったので、この世子とする決定は徳山毛利家および藩主元蕃にとってこの上ない慶事であった。

安政五年（一八五八）一月、養父敬親の命により、この世子広封（元徳）と長府毛利家出の銀姫（安子姫）が華燭の典を挙げ、晴れて結婚した。この結婚により、宗家毛利を親とし、長府毛利家、徳山毛利家を子とする強固な三角関係が構築され、毛利宗家と末家の関係はこの上ない紐帯で結ばれることとなった。このことは、毛利元就による「三子教訓状」、あるいは、吉川・小早川両家の「毛利の両川」を彷彿させる施策で、敬親が幕末の動乱を予測して行った「新たな三本の矢」の構築であったのである。さらに動乱の機運が高揚した文久三年（一八六三）、敬親は末家の吉川家から二男重吉を猶子とし、毛利一族四家の結束をさらに高めた。

この徳山・長府毛利家の結束をさらに強化した出来事は、安政六年（一八五九）長府毛利家から藩主元周の弟元功が、徳山毛利家へ養子として入家したことである。青年元功は、幕末激動期、徳山藩の諸隊山崎隊を率いて鳥羽・伏見の戦に出征するなど活躍したが、慶応四年（一八六八）英国留学の勅許を得て留学し、その英国留学

中に毛利家の家督を相続した。

Ⅳ　毛利元徳の宗家襲封

徳山藩主元蕃の実弟広封が、宗家三十六万石の養子となり、その上、世子となったことにより、宗家と末家の徳山毛利家との関係は、従来になく緊密な関係となった。藩主元蕃としても、実弟が世子として十分活躍できるように、最大限の協力・支援を行おうとした。

その反面、実は徳山藩の財政状況は、幕末段階では完全に破綻を来しており、八方塞がりの状況にあったので、必ずしも満足のいく支援はできなかったのではないかと思われる。

例えば、嘉永六年（一八五三）、黒船を率いてペリーが浦賀に来航した際、幕府は萩藩に対し、西浦賀を含む相州三十九ケ村の警衛を命じた。萩藩は幕命を受けて早速警衛隊を組織して派遣し、各支藩にも応分の支援・派遣を命じた。その命を受けた徳山藩は、「財政不如意」を理由に警衛の派遣を一年間延期させて欲しいとの申請書を宗家に提出している。何とも無様な対応だが、徳山藩の財政はそれほど逼迫していたのである。

文久三年（一八六三）五月、下関海峡で萩藩が外国船を砲撃する攘夷戦が行われたのち、六月高杉晋作により奇兵隊が結成され、それをきっかけに藩内には続々と「諸隊」が編成された。

徳山藩における諸隊の誕生はやや遅く、先ず慶応元年（一八六五）四月、士民有志を中心に富田山崎八幡宮を屯所として結成された山崎隊（二百三十人）、次いで同年十一～十二月にかけて農町兵による諸隊が陸続と誕生した。一方、徳山藩士による諸隊の誕生は農町兵の諸隊よりも遅くて慶応二年（一八六六）以降で、藩士の隊である献功隊（二百十人）の誕生は、戊辰戦争開戦後の明治元年（一八六八）八月のことであった。

慶応二年（一八六六）の四境戦争（幕長戦争）を経て、明治元年（一八六八）正月から始まった戊辰戦争では、本藩が結成した整武隊（五百人）とともに、支藩の中では唯一徳山藩のみが諸隊の山崎隊と献功隊の合計四百四十人を動員して、遠く秋田を経て北海道の函館五稜郭戦に参戦した。本藩が派遣した兵力に匹敵する隊員数を、しかも、苦しい財政事情にもかかわらず遠路北海道までも派遣した裏には、やはり、実弟の世子元徳に対する側面的援護を行う必要があり、例え徳山藩が崩壊しても、最大限の協力を行う必要があったのではなかろうか。

おわりに

明治二年（一八六九）六月、世子元徳が宗家を襲封し、毛利本藩の十四代藩主に就任した。

明治四年（一八七一）五月、徳山藩知事毛利元蕃が「徳山藩の廃止　山口藩へ合併仕度」として、徳山藩の廃藩を決断し、本藩への併合を願い出た。そして、同年六月十九日には山口藩への合併が実現した。明治新政府が廃藩置県を令した僅か一カ月前のことであった。

（こやま・よしまさ　毛利博物館館長）